

Alert 22号

反天皇制運動

[通巻 404 号]

2018 年
4 月 10 日発行

第 22 期・反天皇制運動連絡会

今月の Alert

● 政教分離・民主主義・主権在民・平和主義!!

今こそ私たちの反天論議を!! — * 2

反天ジャーナル ● — なかもりけいこ、捨てられし猫、ななこ * 3

状況批評 ● 明治維新で人々は幸せになったのか — 千本秀樹 * 4

書評 ● 合本『反天皇制運動』 — 池内文平 * 7

太田昌国のみたび夢は夜ひらく (95)

● 現首相の価値観が出来させた内政・外交の行詰り — 太田昌国 * 8

マスコミにかけの天皇制 (20)

● (3・11) 国家儀礼と11回目の天皇沖縄訪問 — (壊憲天皇明仁) その19

—— 天野恵 — * 9

野次馬日誌 * 10 集会の真相 * 13 学習会報告 * 15

反天日誌 * 15 集会情報 * 16

中世史などによると、職能や技芸を生業としたりする者たちの多くが「ナントカ天皇の勅許」などの偽文書を持っていたり、カミへの信仰をルーツとしていたりするという。そのことを知ったとき、かなりの違和感を感じたものだ。自分の腕で世渡りするのに、どうして天皇など必要なものか、つくづくこの列島の人間たちはクソだなとおもった。

とはいえ、自分が不安定労働に従事するようになると、たとえば仕事の受注にあたっては、学歴や資格、企業での職歴など、かなりのフカシも交えて「能力」や「経歴」を飾り立てることもしてしまうわけで、その種のクソとまったく断絶できているわけでもない。

ただ、その類推から、非農業民などの職の「由縁」や「系図」のたぐいが天皇や貴族、権力者に連なったものとされたことの裏側についても、その発祥は、ずいぶんセコいものと実感的に読める。勲章や表彰のたぐいや「おことば」を受けたり、式典を催したり儀礼に加わったりするというのが、意味あるものと意識されるのも、権力者や有名人との写真を喜ぶ卑小なふるまいも、その延長にある。

検察や警察の情報隠蔽や改竄の酷さを知っていれば、この間に露呈した官僚の嘘や隠蔽の事実にも単純に驚きはしないが、これらが権力者グループとの露骨な密通としてあり、なおかつそれが犯罪として意識されていないことには、いまさらながら驚かされた。企業で蔓延しているデータ偽造も同様だ。

つまるところ、それは、階層が分断されるほどに、権力者グループにへつらうための仕組みが再生産され、階層の上下を問わず相互に虚構が拡大されているということだ。それが「洗練」された服属儀礼として認知されることも近いと思わされる。

(蝙蝠)



250 円

● 定期購読をお願いします (送料共年間 4000 円)

● 郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス

東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス

TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://hanten-2.blogspot.jp/> mail: hanten@ten-no.net

今月の

Alert

政教分離・民主主義・主権在民・平和主義!! 今こそ私たちの反天論議を!!



三月二十七日から二十九日、天皇は皇后とともに沖縄訪問をした。今回で一回目、即位して六回目の訪問だ。天皇の強い希望であったというこの退位前の天皇訪沖に関する報道は、一部を除き、一貫して沖縄に思いを寄せる天皇像をつくり出した。「天皇の名のもとで行われた沖縄戦」、沖縄を売り渡した「天皇メッセージ」に触れた記事もあるにはあったが、それも明仁の沖縄に寄せる思いの強さを補強する演出となり果てた。指摘すべきことは多々あるなかで、すでに少なくない人が指摘しているこの訪沖の日付の「意味」について触れておきたい。

三月二十七日は、一八七九年のちょうどこの日、いわゆる「琉球処分」と呼ばれる琉球王国が軍隊を引き連れた日本国家に強制的に併合された日である。また、与那国島を訪問した二八日は、与那国への自衛隊配備二周年目にあたる。この自衛隊配備は与那国の人々を分断し、平和裏に生きる人々の権利を奪い取った。これらの日々を選ぶとは、何とも露骨に政治的な話でしかない。瀬畑源は「明仁天皇論」（『平成の天皇制とは何か』岩波書店）で、明仁が皇太子時代から沖縄や北海道を始め被災地や激戦地等への訪問を続けたその行為について、「国民統合の周縁にいる人々を再統合する役割を担う意志を感じると述べている。そして、「沖縄の人たちを『日本国民』として国家の中に統合する役割を、結果的に果たしてきた」と。今回の天皇の沖縄訪問で思い出したのはこの瀬畑の指摘であった。

八月には北海道の利尻島訪問も検討中であるというが、同様のことがいえる。近代天皇は歴代、さまざまな政治目的で各地を回っているのだ。明仁は「平成天皇」としての最後の務めとして、八月の利尻島を訪問する。その明仁がどのような美辞麗句で形容されようと、そこには君主としての傲慢な役割を果たす天皇像しか見えない。天皇の沖縄訪問については、東京では練馬集会と4・28・29実行委の緊急集会が開催された（集会の真相参照）。

そして三月三〇日、政府は式典準備委員会の最終回を開き、皇位継承の儀式に関する方針を発表した。国事行為として、二〇一九年四月三〇日「退位礼正殿の儀」、五月一日「剣璽等継承の儀」、「即位後朝見の儀」、一〇月二二日「即位礼正殿の儀」、「祝賀御列の儀」、一〇月二二日以降「饗宴の儀」、二〇二〇年「立皇嗣の礼」、「大嘗祭」は一月一四日―一五日とし、「国事行為」としないが公費を支出する」という前回の政府見解を踏襲するとした。

「昭和・平成」の代替わりでは、これら一連の儀式が国民主権や政教分離原則に反するとして各地で訴訟が起こされた。現時点では、マスメディアレベルでもまだこういった記憶を喚起させる記事をつくっていない。また、大嘗祭への「公費支出」に対しても言及し、憲法学者・横田耕一による政教分離違反の指摘も紹介する。憲法との整合性について、いまはまだ言及する余地がある。

り、安倍政権が押し切れない事態、政府内部で憲法との整合性を問題にする声が少なくないということでもある。非公開で「議論しない」ことを前提とする非民主的な準備委員会の問題も大きい。ここは私たちにとつても広く議論を起こしていけるタイミングでもある。

憲法との整合性ということでは、そもそも皇室にまつわる神々を祀り、宮中祭祀を日常的に行う天皇が、一神社の神主ではなく、国家の制度に組みこまれた存在としてあること自体が、政教分離原則から大きく逸脱している。その国家的存在である天皇は、誰に選ばれるでもなく、世襲で代替わりする。それ自体も民主主義、主権在民の原則に反する。それに伴う儀式は宗教的要素にまみれている。だから当然政教分離原則違反。もちろん、特権的な身分にある天皇は平等主義にも反する。国家が関わるなど論外。とてもわかりやすく単純な話ではないか。そして、このような天皇代替わり、天皇制維持の儀式に莫大な税金を投入される。退位・即位・大嘗祭全体にいったいどれだけの費用がかかるのか、計算してみても必要であろう。そして女人禁制問題……と、考えるべきことは多い。

「代替わり」をとともに闘うために集まった首都圏の実行委は、いま「元号いらない運動」を展開している。たくさんの方を集めていきたい。そして今月は、4・28・29、沖縄デーと反「昭和の日」行動だ（チラシ参照）。協力・参加を！

(桜井大子)

「忖度」でうまくされるな

モリカケ問題で「総理の『意向』」を汲んだ「忖度」が注目を集め、二〇一七年度の流行語大賞にまでなった。今年に入り、財務省による森友学園への国有地売却に関する公文書改ざんが発覚し、防衛省や厚労省における文書隠蔽も次々明らかになっている。改ざん・隠蔽は公文書管理法に反するだけでなく、情報公開法で保障されている知る権利をも侵害する。政権と行政による「忖度」で政治が行なわれているとしたら、国会の存在意義は全く危機的状況だ。政治の質を問うことなく忖度だけを問題にしていたのでは、大きな壁となり真相解明への道が阻まれ、法的責任も問えない。

この忖度、もう一つ気になることがある。それは生前退位が天皇の「お気持ち」を忖度して決定されたこと。平和天皇のお言葉として、リベラル派からマスコミまでこぞって支持、天皇退位特例法も国会において全会一致で成立している。憲法違反かどうかの議論もなくすんなり決まってしまった。これでまた戦争責任が曖昧にされ、権威ある「象徴」として位置づけ、市民にとってありがたい存在として崇拝させられていくのかと思うと憂鬱になる。忖度と政治利用で行なわれる代替わり、天皇制を廃止させられない戦後民主主義、どこか間違っている。

(なかもりけいこ)

校長先生が友達に思える時代の不幸

運転中の車のラジオで、川崎の堀之内に『揉み友学園』という名のお店がオープンしたと聞き、あわてて出かけて行ったが、それは既に終了したイベントの看板で、やむなくチネチッタで映画を見て帰ったのは確か昨年の5月のことだった。この間の「サガワさんの国会招致」を伝える報道番組に違和感を感じながら思い出していたのは、この看板にあった「無事認可が下りました」というキャッチのことだ。

国有地払い下げの値引きなんて、あの小学校開設の条件を満たす方便ではなかったか。名前が挙がっている政治家はもちろん、地方行政や中央官庁の中にも「認可」が無事に下りるのを心待ちにし、後押しもしてきたそれなりの数の人間がいたはずだ。教育勅語を暗唱できる生徒たちが卒業していくのを夢見たのは、けしてあのオッサンやオバハンだけとは思えない。

昭和でいえば30年代から60年代まで、卒業記念のレコード板にきざまれた校長先生86人の挨拶を、書籍として復刻した『校長先生のはなし』（リクオ舎）が出版された。小学校から大学まで卒業生の年齢は違っても、校長の挨拶は時代を鏡として映しているが、他人の子供をダシに使って公のゼミを引き出すとするさしは、どこにも見当たらない。

(捨てられし猫)

ああ、けったくそ悪い！

しかしさあ、どういつもいつつも、あっちもこっちも酷すぎない？ なんかホントに呆れるわ。首相も大臣も、役所も役人も。人をバカにするんじゃないわよっ！ 今どき、女性が土俵にあがってはいけないとか意味不明。どこの空にもオスブレイのような異様なものは飛んでちゃダメだよ。人間にコントロールできない核や放射能など扱ってはイカン！ ああ、もう完全にテレビの前で怒ってるおばさんだわ……。

若い人とリタイア組の働き口がうまくマッチしていない状況のなか、そこにロボットが入りこんで来ている。たしかにロボット掃除機は便利かなと思ったりしちゃうけど、「オッケー、グーグル」などとは口が裂けてもいいたくないし。

おとしの映画だけど、ケン・ローチの『Doc. Break』をやっと観ることができた。イギリスにおける民間に委託された福祉システムの不条理を描いた作品だ。身につまされる話だということば聞いているけど、かなり現実的だった。主人公は私と同年！ 今はかろうじて使えている（と思ってる）パソコン作業だって、いつまでできるだろうか？

コンピュータも経済もそんなにヴァージョンアップしなくていいのだ。新しい武器など必要ではない。どの世代でもどんな人でも自分が自分らしく生活できる選択肢を残しておいて欲しい。

(私、ななこ)

状況批評

思想・状況・批評

明治維新で人々は幸せになったのか

千本秀樹（近代史研究）

今年、二〇一八年は明治維新一五〇年、政府はなにやらごそごそやろうとしているが、盛り上がりがないことはなほだしい。アベノミクスはうまくいかず、森友学園問題をはじめとして政治家と官僚に対する不信感が絶頂に達しているなかで、国民も明治維新一五〇年を祝おうという気にもならないのではないか。わたしにはそれよりも、人々のあいだに歴史への関心が薄まっているような雰囲気になる。本稿では、明治維新と天皇制の一五〇年について抜本的に見直すために、作業の取りかかりとしたい。

1、明治維新で人々は幸せになったのか

明治維新はアジアで唯一成功した近代化への革命であって、そのために日本は植民地にならずにすみ、先進国として発展した、明治維新はすばらしかったという認識は、国民のあいだでは、いや、アジアの民衆のあいだでも圧倒的多数派である。アジア諸国から日本へ来る歴史系の留学生にも、「日本の近代化、経済的發展から学びたい」という者が多い。「あなたの国を侵略することによって経済的に発展したのですよ」といっても、なかなか問題意識は変えてもらえない。わたしと多くの関心を共有する先輩研究者でも、明治維新をプラスに評価する意見しか聞かない。封建制国家から中央集権国家へ変わったことは、必然ではあろうが、わたしはあえて「発展」とか「前進」とかは呼ばない。それは生産力発展史観への疑問からであるが、そこを譲って中央集権国家の成立を前進だとしても、それ以外に明治維新で良いことはあったのだろうか。

経済的發展によって「先進国」になったということは、帝国主義化して植民地を収奪し、植民地分割戦争を行なったことと同義である。先進国になったことを賛美し、侵略戦争を悪いこととして反省し批判するという矛盾

盾を、人々は自分のなかでどのように処理しているのだろうか。もちろん侵略戦争と認めたくない人も少なくないのだろうが、おもしろいエピソードをひとつ。山口組三代目組長田岡一雄が人権派と呼ばれた遠藤弁護士に左翼と右翼の違いを質問したときに、前の戦争を侵略戦争だというのが左翼、それを認めないのが右翼だと答えると、田岡組長は「じゃあ俺は左翼だ、あれは侵略戦争に決まっている」といったという。これが一般的な認識ではないだろうか。

明治維新が成功したかどうかは、それによって人々が幸せになったのかが唯一の基準であるということとは、承認してもらえらるだろうか。「国家としての発展が国民の幸福である」という論者とは、別の議論が必要となる。幸せになったと考える最大の根拠は、やはり生産力の発展であろう。大量の消費が可能になり、江戸時代にくらべると餓死者は減ったというものである。大量消費は資本制の発展によるものであるが、欲望を肥大化させることが資本制発展のカギであり、大量消費の是非については、ここでは論じない。ただ、江戸時代にくらべて餓死者が減ったというのはおそらく事実であろう。もうひとつ、職業選択の自由をあげる人もいるが、これは誰でも働かせることができるという資本家による「雇用の自由」がより本質である。現在であっても、職業選択の自由はまったく形式化しているといわざるをえない。

2、最大の不幸としての兵役

一方で最大の不幸は、徴兵制によって、江戸時代は戦争と無縁であった人々が、国家によって殺され、また殺人者とされたということである。一五年戦争で戦死した軍人・軍属は三一〇万人といわれ、空襲によってな

くなった正確な人数はわからない。これは江戸時代の餓死者より多いだろう。日本兵が殺した人数は数千万人。兵士の民衆としての戦争責任は指摘されることは多いが、殺人者とされたことの苦しみが論じられることは比較的少ない。戦場で殺し、殺されることの恐怖が精神のバランスを失わせ、復員しても元の生活に戻れない人々の存在は、ベトナム戦争、イラク戦争で注目されるようになり、アフガン・イラク戦争の復員兵のうち、PTSDで苦しむ者は五〇万人とされる。

日本でも報道は少ないが、一五年戦争で精神に傷を負って戦傷病者特別援護法（一九六四）で治療中の人数は、一九七八年段階で一、一〇七名（共同通信社調べ）、現在でも終戦を認識できず入院を続けている人がいる。これらの人々を「未復員兵」（精神的に復員できていない）と呼ぶが、TBSの吉永春子がドキュメンタリー番組や著書『さすらいの未復員』で世に知らしめた功績は大きい。また自衛隊のイラク派兵で自殺した隊員の数には五四名とされるが、一〇〇名に上るとい説もある。

また、徴兵制は国民に対して平等であつたわけではない。最初の徴兵令では代人料（四〇〇円→七〇〇円）を納めた者、戸主、北海道に本籍を持つ者などは逃れられた。男子のいない家への養子が流行し、夏目漱石は北海道へ戸籍を移して徴兵を逃れた。これらの公的な徴兵逃れ制度はやがて廃止されたが、志賀直哉は裏から手をまわして、耳が悪いことにして逃れた。

このように、明治維新を経て、民衆は国家によって殺され、殺人者の立場に立たされたのである。これほどの不幸は、ほかにはない。餓死者は減ったかもしれないが、強い国家、強い軍隊を作るには、国民が「健康」でなければならぬ。厚生省はそのような目的で一九三八年に設置されたことを忘れてはならない。

3、小作人と労働者はなぜ生まれたか

日常生活においてはどうかだったのか。比較対象が江戸時代であり、維新後も統計が確立するのは、たとえば最初の国勢調査が一九二〇年であるように、かなり後になるので、変化を正確に述べるのは容易ではない。

ここに興味深い記事がある。現在の労働組合の源流である友愛会の機関紙『友愛新報』第3号（一九一三年一月）に、東京帝大出身で監獄学の内務官僚小川（河）滋次郎の「労働神聖論」が掲載されている。小川は鈴木文治との縁で、友愛会に協力しており、前年一二月の友愛会例会で労働者に対して話されたものである。全体の趣旨は、労働者自身が労働が神聖であることを社会に理解させ、労働者が富国強兵の原動力とならなければならぬというものだが、そこにあげられている「日本は果して一等国？」という疑問を掲げて引いているデータがおもしろい。なお日本は日清戦争の勝利で「極東の憲兵」、すなわち欧米の帝国主義の代理としてアジア諸国を監視する役割を負わされ、さらに日露戦争で「一等国」と呼ばれるようになり、後の欧州戦争（第一次世界大戦）で五大国に数えられるようになる。

小川はまず、外国貿易高、貯金額が少なく、「世界の三四等国とさへ肩をならべることが出来ない」としたうえで、年間自殺者数が一万一千人で、ドイツ一万二千人、フランス八千人、アメリカ三千人、急増しているロシアで四千人と、日本の自殺者数が多いことを指摘する。次に年間死産者の数。ドイツ六万四千人、フランス三万九千人に対して、日本は一五万四千人と「世界無比である」という。離婚数が第一位というのをどう評価するかはここでは置いておく。犯罪者数が日本は年間八万人で、イギリスは一萬五千人など、他国は「極少数である、つまりは人民が悪い」といって、人民の自覚をうながすのであるが、小川の下す評価は別として、これらの数字は、人民がいかに苦しんでいるかを示している。

江戸時代には、スラム、戦前の用語でいうと「貧民窟」は存在しなかった。スラムの形成は日清・日露戦争期である。これは、資本制と地主制を確立させるために、政策的に作られた。言いかえれば、労働者と小作人を産み出すためである。

明治六年の政変でただ一人の陸軍大将である西郷隆盛をはじめ、士族陸軍が鹿児島へ移った。山縣有朋が設計した「国民皆兵」の徴兵令を、山縣失脚後、桐野利秋らの反対を押さえてこの年に施行したのは西郷隆盛である。西郷が士族陸軍を鹿児島へ連れて帰ったために、日本陸軍は徴兵制軍

隊にスムーズに移行できた。

しかし大久保政権は、地租改正事業、これも西郷らの留守政府が実施したのだが、始まったばかりで、税収はわずかである。しかし、西郷との戦争のために、陸軍を確立し、武器を購入しなければならぬ。そのために政府は紙幣を大量に印刷した。その結果は、当然のインフレである。西南戦争後の一八八一年、松方大蔵卿は紙幣を回収し、デフレ政策を実施した。物価・米価は下落した。高校の授業を思い出してほしい。「地租は地価の三%を金納で」と丸暗記させられたはずである。地価は地券の裏に明記されており、現在の評価額のように、あるいは相場のように変動したりはしない。米価が下がっても、変わらない額の地租を、米を売って納めなければならぬ。米価が下がると、中小零細農民には、納税が難しくなる。

明治維新によって、はじめて土地を売るという概念と制度が成立した。江戸時代の土地は誰のものであったのかという議論は興味深いが、ここでは触れない。松方デフレによって納税できなくなった農民は土地を売って、小作人になる。ここに地主制が成立する。小作料は地租プラス地主の利益だから、当然地租より高額である。小作人の生活は、小作人になる前より厳しくなる。小作人の次男以下は、農村では食べていけない。やむなく都市へ出るが、仕事も住む家もない。スラムが成立すると同時に、低賃金でも働こうとする。当時の工業は繊維産業が主で、求められたのは女子労働力であった。男が働ける職場、工場は僅かであった。資本家の側からいえば、徹底した低賃金で労働力を確保できたのである。労働力の析出過程、日本資本主義の原始的蓄積過程を教科書的に見てきたが、松方デフレ下の農村の惨状は、たとえば北村透谷の作品、労働者の暮らしは有名な著作が多く、スラムの状況については興味本位のものも多いが新聞記事（『明治新聞集成編年史』、『大正新聞集成編年史』など）をみてほしい。

4、江戸時代と比較して

江戸時代の農民の暮らしはどうであったか。学校教育ではいまだに「生かさず、殺さず」的に教えている教師も多いようだが、研究者の世界からは、佐藤常雄・大石慎三郎『貧農史観の見直し』（講談社現代新書、一九九五年）

をはじめとして、江戸時代の農民は徹底的に収奪されてきたという見方を修正してほしいというアプローチが続いている。また江戸時代後期・末期の被差別民についても、農業以外の生業にもついていた彼らが、商品経済の発展によってゆとりある暮らしをしていたことが強調されるようになっていく。一八八五年の岡山藩洪染一揆は、被差別民に対して出された儉約令が一般民とは別のものであったことに対する被差別民の闘いであり、撤回をかちとった。被差別民に対する儉約令のなかに、絹の着物を着るなどという項目があったことが注目される。

渡辺京二『逝きし世の面影』（平凡社、一九〇〇年）は、幕末・明治初期に日本を訪れた西洋人が、日本の庶民とその暮らしぶりを著作のなかでいかに賛美しているかという例を、これでもか、これでもかとうんざりするほど集めた著作であるが、幕末の庶民の暮らしは、通商開始（一般的には「開国」といわれるが、江戸時代は鎖国していなかったというのが圧倒的多数派）による経済混乱はあったとしても、もう少し長いスパンでみれば、貧農史観は改められなければならない。

本稿では述べられなかったが、幕末の識字率は世界でも突出し、江戸時代の衛生環境や上水道の普及は世界でも群を抜いていた。技術を含めた文化面でも豊かなものを持っていた。黒船を見て、日本は遅れていると勘違いしたのは、実は軍事面だけであった。

総じて考えると、明治維新で、人々は確実に不幸になった。そして天皇制国家は、「これが日本文化である」という均質的な「文化」を創作して国民に強制し、文化を貧困なものにした。さらに太平洋戦争中に捏造した、「天皇が将軍を任命して政治を委嘱し、幕府を開かせた」という皇国史観は、現在でも歴史教育を貫いており、天皇家が世界でもっとも長く続く家柄であるとの幻想をふりまいている。

（未完）



合本『反天皇制運動』（上・下）

池内文平

えらいものがあらわれた。第一期・反天連が発行したニュース「反天皇制運動」（全83号）の完全復刻合本、二分冊。内容もさることながら重量もかなり、重い。それを天野さんから「プレゼント！」といって渡された。プレゼントって？ ぼくらには似合わない、あの、「忘れものを、届けにきました」って、あれ？

たしかに病気になる以前から出不精がちで「運動」不足ではあった。ちよどよい機会かな。初心忘るべからず、というけど、初心そのものが何であつたか忘れていた記憶喪失の状態ではあるが、スロウ・ストレッチでこの「時代の贈り物」をのぞいてみよう。

正確にいえば、「第一期・反天皇制運動連絡会」というのは存在しない。「第一期」はあとから付けられた「追号」みたいなもので、当時はそのままの「反天連」。その反天連が毎月出したニュース、つまり今回の合本に収められているのは、一九八四年三月一日の創刊準備号（第0号）から一九九一年二月一日の第83号までの八四冊、プラス、号外・特別号三冊の合計八七冊ぶん。八四年から九一年の七年間なんだけど、現在からだと二七、三四年前のことになる。

一昨年に山岡強一さんの虐殺三〇年の集会に参加したばかりとしては、三〇年前のことといつてもつい昨日の感覚なのだけど、やっぱり一般的にいつて、三〇年前のことなんてずいぶん昔の話にちがいない。その大昔に何が問題となっていたか？ 第0号の「反天皇制運動連絡会結成のよびかけ」という文章には、主旨の一番目として「主要に、Xデー及びXデー準備と対決する大衆的反天皇制運動の形成をめざす」と明記されている。

そう、Xデー。裕仁天皇の死ぬ日だ。裕仁は八九年

一月七日に死亡するわけだが、もちろん誰も日付までは測定できず、ただ彼は一九〇一年生まれだから「そろそろ」の想定で、死ぬ日をXデー、その前をXデー状況、その後を葬儀（喪）と即位（祝）の入り混じる奇妙な期節と設定して、あれこれの予測を交えながら敵の出かたに具体的に対応していく、という毎日だった、と記憶している。だから、そういう意味で、この合本の一頁一頁はリアルタイムのドキュメントであり、それを綴った合本は、それ自体が運動の流れを体現し、いきいきとそれを伝える「運動体」そのものであるといつてもよい、と思う。

ほくも、その第一期の事務局に出入りしていて、毎週火曜日の会議はともかく、そのあとの「二次会」にはわりとちゃんと出ていた（という記憶は鮮明にある）が、いつぼうで、ぼくは芝居をやっていて、その当時は「風の旅団」という集団を組んでいた。風の旅団は一九八二年に結成して八三年から九一年まで芝居を続けていたから、第一期の反天連の活動期間と丸ごと重なる。いま合本をめくってみると、八五年一月の第10号に「風の旅団法大公演弾圧と〈この時代〉」という記事がある。ぼくがこのニュースに書いた最初の（署名）文章で、前年一月の法政大学・市ヶ谷キャンパスでのロックアウトによる公演弾圧の報告だ。そうそう、市ヶ谷付近といえば、八五年は中曽根首相の靖国公式参拝があり、九月の第18号には「8・15戦士」の筆による「8・15靖国神社公式参拝阻止境内抗議闘争顛末記」の実況中継ふう戦闘記が載っている。ちなみにぼくはこれをネタに、同年九月の法大リベンジ公演では、テントの中に巨大な鳥居を立てて、8・15戦闘の「再現」をささやかにやってみた。が、このシ

ンは意気込みのわりには「やや受け」で、闘争史にも演劇史にも何の役にもたたなかった、けど。

それはともかく、ぼくらはもう一方で山谷に支援に行っていて、その山谷では八三年一月三日にヤクザが「大日本皇誠会」の名で登場、八四年一月二日に佐藤満夫さんが刺殺され、八六年一月一三日には山岡強一さんが射殺された。ニュースの最初の「号外」は八六年一月一六日付の「山岡強一氏追悼」の号である。

以上は、ぼくの関心領域でちよつと振り返ってみたものだけど、みんなはどうなんだろう？ 死ぬだけ、襲名するだけで、万人に迷惑をかけまくる天皇制のことだから、合本の各ページに登場する一つひとつの記事は、みんながそれぞれ相互につながっていく「経験」になっているにちがいない。

と、（ついでに）大切なことを書きそえておけば、なんといつても「手書き」。ワープロではなく手で書いた誌面の数々だ。さつきこの合本はドキュメントであり運動体であるといつたけど、読みながら感じる図抜けたライブ感は、書かれた内容もさることながら、書かれた、つまり「手書き」にあるとぼくには思える。もちろんこれはメソッド嫌いで、つねに現在性に重きをおくテント芝居育ちのぼくだけの好みかもしれない。

とまれ、この文章が載るのは、合本よりも二七年あとの第X期・反天連のニュース、通巻404号だ。「残り」はこの合本の約四倍はある。過去は、長い。それだけでなくみられる「時代の贈り物」は豊富だ、ということにしておこう。

みたび

太田昌国の夢は夜ひらく95

現首相の価値観が^{しめつたい}出来させた内政・外交の行詰り



我慢して、安倍晋三氏が書いた（らしき）本や対談本、安倍論などを読み始めたのは、二〇〇二年九月一七日の日朝首脳会談を経て、数年が過ぎたところからだったか。その数年間には、彼が拉致問題を理由にした対朝鮮強硬派であるがゆえにメディア上での注目度が上がった歳月や、二〇〇一年に「慰安婦」問題を扱ったNHK番組に関して、「勘ぐれ」という言葉を用いてNHK幹部に改竄するよう圧力をかけたことが明るみに出た二〇〇五年の日々が含まれている。やがて二〇〇六年、小泉氏の後継者をめぐる自民党総裁選が近づくと、件のNHKニュースは、安倍氏に「国民的人気が高い」という形容詞を漏れなく付けるようになった。それ以降現在にまで至る経緯は、もはや、付け加えることもないだろう。

最初の本を目にした時から、とんでもない人物が台頭してきたものだとつくづく思った。論理がない、倫理もない、歴史的な知識も展望もない、あるのは、ギラギラした、内向きで排外主義的なナショナリズムだけだ。昔の「保守」はこれほどひどいものではなかった、と独り言ちた。一九八〇年代後半以降、『正論』『諸君！』

などの極右雑誌に目立ち始めた、歴史の偽造を厭わない低劣な文章群は、とうとう、こんな政治家を生み出す社会的な基盤を造成したのかと慨嘆した。そうは思いつつも、拉致問題の捉え方を軸にその言動の批判的な分析は続けてきた。だから、関連書を読み続けたのだ。そのとき思った——右翼がここまで劣化すると、左翼も危ないぞ、と。まもなく、ソ連的社会主义義体制が崩壊して、左翼は危ないどころか、理念的にはともかく運動としてはほぼ消滅した。

批判的な左翼が消えた時代に、安倍的な価値意識に彩られた社会が開いた。五年有余が経ち（わずか一年で瓦解した第一次政権の成立時から数えると一二年が経ち）、その結果を私たちは日々見ている／見せられている。改竄・隠蔽・捏造が公然と罷り通る内政の荒廃ぶりは、かくまでか、と思うほどだ。幼稚園の子どもたちに教育勅語を暗唱させ、軍歌を歌わせ、首相の妻を前に安保法制の議会通過を喜ぶ台詞を斉唱させて彼女を涙ぐませるような「愛国主義教育」を行なうことを目指した私学経営者に、首相とその取り巻きが肩入れし、国有地の安価な払い下げと設立認可を急いだ——森友学園問題のこ

の原点に、強権主義的な安倍政治の本質がまぎれもなくにじみ出ている。

米国頼み一本鎗が「方針」であったかのような外交の行き詰まりぶりも、内政同様、見苦しい。今年度初頭の金正恩氏の路線転換以来、朝鮮半島情勢はめざましい進展ぶりをみせている。対朝鮮外交における「対話ではなく圧力」路線の盟友であったトランプ米大統領は来る五月の米朝首脳会談を決意する一方、日本に対する輸入制限も発動した。「日本ひとり蚊帳の外」という印象がぬぐい難い。

あるジャーナリストの調査によると、首相がこの五年間、「拉致問題は、安倍内閣の最重要課題であります」と本会議や委員会でも語ったのは五四回に上るといふ。一年に一〇回以上もこんな発言をしていることになる。その実、解決のための努力を少しもしていないことは、蓮池透氏や私が夙に指摘してきたとおりである。拉致問題あったればこそ首相に上りつめた彼は、自らが煽った「朝鮮への憎悪感情」が社会に充滿していることが政権維持の必要条件なのだから、日朝関係は現状のままでもよいのだろう。去る二月の日韓首脳会談において、「米韓合同軍事演習を延期するな」と主張した首相に、「我が国の主権の問題」とする韓国大統領は反発した。一六〇カ国との外交関係を持つ朝鮮との断交を国際会議で求めた日本国外相の演説は、あるべき外交政策を知らぬその無知無策ぶりに、心ある外交官の失笑を買っただろう。この期に及んで外相は韓国へ行き、四月の韓朝首脳会談で拉

致問題に触れるよう、韓国外相に要請するという。首相は「盟友」トランプに会いに行き、五月の米朝首脳会談での同じふるまいを頼むのだという。自力解決の意図も能力もないことを自白したに等しい。河野外相はさらに、三月三十一日に「北朝鮮は次の核実験の用意を一生懸命やつ

ているのも見える」と語った。私も時々見ている米ジョンズ・ホプキンス大学の朝鮮分析サイト「38NORTH」は、逆にその動きは激減しているとして、外相発言の根拠に疑問を投げかけている。中国外務省は、各国が東アジアの緊張緩和に向けて努力を積み重ねている時に「その過

程から冷遇されている日本は、足を引っ張るな」と不快感を示した。
かくも無惨な外交路線があり得ようか。内政・外交ともに進退窮まっている現政権の現状は確認できた。次は何か、が私たちの課題だ。
(4月7日記)

マスメディアの
反天皇制 21

〈3・11〉国家儀礼と11回目の天皇沖繩訪問 ——〈壊憲天皇明仁〉その19

一 恵 野 天
いんげん

多様な抗議行動がくりひろげられた〈3・11〉原発震災から七年目の三月一日、私は、東京都千代田区にある日本原電本店前の、「日本原電は東海第二原発を再稼働するな! 首都圏の原発を止めよう!」の呼びかけを発した抗議行動に全力を集中した。東海第二原発のある茨城県内各地から集まった人々と東京周辺から合流した人々を「本店」前に案内し続ける作業である。「再稼働阻止全国ネット」のスタッフとしての活動だ。五〇〇名の人々の本店包囲の抗議の中でも、政府・電力会社(東電ら)がキッチンと被災者に責任を取ろうとしないことと、原発再稼働の動きは、メダルの表裏の関係にあることが語られていた。この加害への無責任と、新たな放射能ふりまき政策(再稼働)の加速の現実を〈美しい言葉〉で操作的に隠蔽するためのマスコミじかけの国家儀礼が、今年も持たれ、安倍首相の被災者(他)に心を寄せているかのごときスピーチが、今年

もくりかえされた。もちろん明仁天皇からバトンタッチした、次の次の天皇予定者「秋篠宮」の被災者(他)に寄り添うような言葉も、首相のスピーチの上にかぶさるようになりまされた。こうした天皇(皇族)を中心に置いた国家儀礼は国家の責任を忘却させ、人々を新たに国(天皇)にすがりついていくのが当然という気分の方へ向かって組織していくための、象徴天皇制国家の高度に政治的な儀礼なのだ。だから「8・15」式典同様、政府は毎年、忘れることなくくり返すのである。三月二十四日、「天皇『代替わり』と安保・沖縄を考える4・28―29連続行動実行委員会」主催の集会「自衛隊配備と天皇の与那国訪問」で、私は主催者側の報告者として発言。この集まりは三月二十七日から二十九日の三日間の、アキヒト天皇(夫婦)の、おそらく最後の、皇太子時代を含めて一回目の沖縄訪問を睨んでの抗議集会である。これは、自衛隊配備強化が進む与那国へもわざ

わざ足をこぶ、軍事強国を目指す安倍政権の露払いという天皇政治だ。天皇夫妻が「平和主義」者としてふるまい、しきりとそう自己アピールしていることが、「積極的平和主義」という政治的ボールをかぶせて米軍にくつついての軍事強国化路線をひた走っている安倍政治にとって、フルに利用価値があるのだろう。

もちろん、沖縄メディアも含めて、全マスコミがクローズアップしているのは、天皇の「平和」のための沖縄戦死者たちへの「慰霊」行動(儀式)である。

三月二十七日の『産経新聞』のコラムには、こうある。

『石をぶつけられても』という覚悟を決められていたという。皇太子ご夫妻時代の天皇、皇后陛下が初めて沖縄を訪問されたのは、昭和50年7月である。本土復帰からまだ3年しかたっていない。皇室にたいする複雑な感情が渦巻いていた▼南部戦跡にある慰霊碑『ひめゆりの塔』で事件は起こった。地下壕にひそんでいた2人の過激派に投げつけられたのは火炎瓶である』。

この経験が、「長く続く戦没者の『慰霊の旅』の原点になった」と、文章は続く。「何事もなかつ

たかのように」沖縄訪問が繰り返されることで、天皇夫妻の〈お詫びの気分〉が沖縄の人々につたわって、天皇への反発から感謝へと時代は移ったのだ、そう語りたいのだろう。国家の支配者のネライはその通りであり、天皇夫妻は、その方向へ向けて、フル稼働である。

私は、この日の集まりに、火炎瓶を投げた知念功のドキュメント『ひめゆりの怨念火』（一九九一年・インパクト出版会）を読みなおして出かけた。

寄せ場の活動のリーダーでもあった船本洲治の皇太子来沖抗議の嘉手納基地での焼身自殺（75年6・24）もあり、この時の沖縄の「戦犯天皇沖縄上陸」への抗議行動は激烈なものであったが、それは労働組合・地域住民組織のしたたか度幅広い反対行動の流れの中に突出した行為であったことが、その本でよく読めた。もう一点、知念らの裁判の口ジック。公務執行妨害というが、天皇夫妻の行為は「公務とはなんら関係ない」から「無罪」とい

う弁護論。「国事行為」ではない違憲の「公務」（沖縄訪問）と天皇（夫妻）を問い詰めることはしてないが、まだ当たり前の主張が法廷でも存在していたのだ。政府と天皇は責任の帳消しのための政治セレモニーをかくのごとく繰り返している。私たちは、責任を問いつけた抵抗運動の歴史をこそ現在の闘いの中で想起しつつ、責任を問いつけなければならない。

野矢将日誌

3月1日～3月31日

【3月1日】
久子◆故高円宮の妻久子が、日本心臓財団の名譽総裁に就任。

【3月4日】
代替わり◆政府が、2019年5月1日の新天皇即位に伴って実施される「剣璽等承継の儀」を巡り、首相と閣僚、衆参両院議長、最高裁長官ら参列者について、女性の出席を可能とする方向で検討に入ったと、政府筋が明らかに。女性皇族の立ち会いについて、男性限定の前例から認められないとの意見が強く、対照的な対応となる可能性があるとの報道。

【3月5日】
明仁、美智子◆宮内庁が、明仁、美智子が27～29日の日程で、沖縄県を訪問すると発表。那覇市に宿泊し、戦没者を慰霊するほか、近くに台湾を望む与那国島にも初めて赴く予定で、沖縄県に心を寄せ

てきた2人が再訪を希望したとの報道。沖縄県の翁長雄志知事が「広く県民とのふれあいを深めていただき、思い出深いものとなりますよう、心からお待ちしております」とのコ멘トを出す。

【3月6日】
代替わり◆政府が閣議で、2019年4月30日の明仁の退位に伴い「退位の礼」を行うとする政令を決定。退位日の同日に施行するもので、明仁が退位後に「上皇」、美智子が「上皇后」に就いた後の関連規定も整備し、生活費は、明仁とその家族の日常経費に充てる「内廷費」から支出すると定めたとの報道。

久子◆宮内庁が、故高円宮の妻久子に38度台の発熱の症状が出て、インフルエンザと診断されたと発表。

大逆事件◆「明治」末期の大逆事件で獄死した臨濟宗妙心寺派の僧侶峰尾節堂

（1885～1919年）の百回忌を迎え、生誕地の和歌山県新宮市で、墓の前に石碑が建てられる。人権尊重を願う言葉が刻まれているとの報道。

改憲◆希望の党が憲法調査会（会長・細野豪志・元環境相）で、首相による衆院解散権の制約を改憲案に盛り込む方針で一致。天皇の国事行為を定めた憲法7条を根拠とした解散を認めず、首相の解散権乱用を防ぐのが狙いとの報道。

【3月7日】
明仁、美智子◆市町村が消防を運営する「自治体消防」70周年を記念し、東京都墨田区の両国国技館で開かれた式典に出席。

「体育の日」◆2020年東京五輪の混雑緩和策として開会式がある7月24日と前日の23日、閉会式翌日の8月10日の3日間を休日にする構想で、超党派のスポーツ議員連盟で幹事長を務める遠藤利明・元五輪相が日本体育協会理事会で、同年に限り10月第2曜日の「体育の日」を7月24日に移す案について理解を求める。

【3月8日】

徳仁◆東京・上野の東京国立博物館の平成館で開催されている、世界遺産の仁和寺（京都市）ゆかりの仏像などを集めた特別展を鑑賞。

【3月9日】
裕仁◆裕仁が採集した、クモヒトデの仲間て主に深海にすむ「テヅルモヅル」の標本が新種だと分かったと、東京大の岡西政典・特任助教（動物分類学）らが、ニュージーランドの科学誌ズータクサに発表。

「慰安婦」問題◆旧日本軍の元「従軍慰安婦」を支援する「韓国挺身隊問題対策協議会」が主催し、外国の支援団体も集まった「アジア連帯会議」がソウルで開かれ、韓国をはじめ「慰安婦」問題の「被害国政府」が連携して日本政府に問題解決や真相究明を促すべきだとの要求事項をまとめる。

会食◆安倍晋三首相が、東京・高輪の「高輪館」で、日本テレビの大久保好男社長と粕谷賢之・報道解説委員長と会食。

【3月10日】

明仁、美智子◆東京都新宿区の東京オペラシティコンサートホールを訪れ、東日本大震災の復興支援チャリティコンサートを鑑賞。鑑賞後、合唱部の生徒らと懇談。

秋篠宮、紀子◆東京大空襲から73年を迎え、遺骨が納められている東京都慰霊堂（墨田区）で営まれた法要に参列。

避難指示解除地域◆東京電力福島第一原発事故の避難指示が前年春に一部で解除された福島県の4町村のうち、富岡町と浪江町の住民の約半数が帰還しない意向を示したことが、復興庁などが実施した調査で分かる。

【3月11日】

明仁、美智子◆東日本大震災から7年となり、明仁の定例健康診断のためにそろって訪れていた宮内庁病院で、発生時刻に合わせて黙とうしたと、宮内庁侍従職が明らかに。

秋篠宮、紀子◆東日本大震災の発生から7年を迎え、東京都の国立劇場で開かれた政府主催の追悼式に参列。秋篠宮「避難生活が長期化する中、被災者の心身の健康のことは深く心に掛かります」。

【3月12日】

国籍喪失規定◆日本人として生まれ、後に外国籍を取得した欧州在住者ら8人が、外国籍を取得すれば日本国籍を失う国籍法の規定で祖国とのつながりが奪われたとして、国に日本国籍の維持などを求めて9日付で東京地裁に提訴したと報道。

【3月13日】

明仁、美智子◆皇居・御所で、訪日した

スリランカのシリセナ大統領夫妻と会見。宮内庁によると、大統領が病院や学校の建設などの支援に謝意を示し、明仁が東日本大震災での支援に「心から感謝しております」と伝えたと報道。第2次大戦後のサンフランシスコ講和会議で「憎悪は憎悪によってではなく、愛によってやむ」と演説し、対日賠償請求の放棄を宣言したスリランカ初代大統領のジャヤワルデネについて触れ「日本に対し、温かい言葉を述べたことをよく覚えている」と話したという。

天皇杯、皇后杯◆宮内庁が、日本車いすバスケットボール選手権大会など、障害者スポーツの4大会に天皇杯や皇后杯を贈ると発表。

【3月14日】

反基地運動弾圧◆米軍普天間飛行場の名護市辺野古移設への抗議活動に伴い、威力業務妨害罪などに問われた反対派リーダー、沖縄平和運動センター議長の山城博治被告に、那覇地裁が、懲役2年、執行猶予3年（求刑懲役2年6月）の判決を言い渡す。被告が即日控訴。判決理由で柴田寿宏・裁判長「憲法で保障される表現の自由の範囲を逸脱している。犯罪行為であり、正当化できない」。

セクハラ◆米紙ニューヨーク・タイムズは著名な米建築家リチャード・マイヤーが1980年代から複数の女性にセクハラ行為をしていたと報じる。1997年に日本の「高松宮殿下記念世界文化賞」を受賞したと報道。

【3月15日】

明仁、美智子◆翌年の代替わり後に仮住まいすることが決まっている東京都港区の高輪皇族邸（旧高松宮邸）を訪れ、2度目の下見。宮内庁は当初、運動室や研究室を設けるため、敷地内に仮設の建物を新たに造る計画だったが、必要最低限の改修で経費を節約してほしいという2人の意向を踏まえ、取りやめたというと報道。

【3月16日】

徳仁◆ブラジルで開かれる「第8回世界水フォーラム」に出席するため、成田発の民間機で現地に向かう。「私的」旅行の位置付けと報道。

代替わり◆菅義偉・官房長官が記者会見で、2019年5月1日の新天皇即位に伴って実施される「剣璽等承継の儀」への皇族の参列者を巡り「平成の代替わりの例を踏襲することを基本に今後検討する」。1989年の明仁の剣璽等承継の儀では、皇族は男性の出席に限定しており、翌年の儀式もそれにならう可能性がある」と示唆した発言。新天皇即位の儀式などの在り方を定めた基本方針を3月に決定するとして上で（参列者など）各式典の詳細については、基本方針を踏まえて別途検討する」。

【3月17日】
徳仁◆「第8回世界水フォーラム」に出席するため、開催地のブラジルに向け、経由地の米南部フロリダ州マイアミに到着。宿泊先のホテルで1泊。

【3月18日】
徳仁◆ブラジルの首都ブラジリアに到着。

これに先立ち、経由地の米南部フロリダ州マイアミで、現地の日本や米国などの子供たちが日本の教科書で学習する補習校を訪問。郊外にある植物園を見学。

【3月19日】

明仁、美智子◆宮内庁が、明仁、美智子が、初代天皇とされる神武天皇を祭る橿原神宮（奈良県橿原市）に対し、銅鏡を贈ったと発表。美智子が皇居内の紅葉山御養蚕所で育てた日本純産種の蚕「小石丸」の絹糸を使ったひもや箱なども一緒に贈っており、明仁、美智子が2016年4月、橿原市にある神武天皇陵を参拝し、神武天皇の没後2600年式年祭に臨んだ際、2人から銅鏡を贈りたいとの意向が示され、制作を進めていたという」と報道。

徳仁◆ブラジルに到着。首都ブラジリアで「第8回世界水フォーラム」の開会式に出席。英語であいさつし「水に関する歴史上の経験と知恵から学び、水に関する情報を共有し、水を保全し利用するために協力しなくてはならない」。これに先立ち、ブラジリア郊外の「セラード農牧研究センター」を視察。現地の日本大使公邸で日系人約50人と懇談。当年は日本人のブラジル移住から110年で、関連行事が企画されているとして「成功をお祈りしております」。

福島原発事故◆国連人権理事会（47カ国）が、日本の人権状況の審査に関する会合を開く。東京電力福島第1原発事故後、福島県郡山市から避難し、大阪市で子ども2人と生活する女性がNGOを代表し

て演説、支援継続の必要性を訴える。市民を放射線から守る日本政府の施策は十分だと指摘。

〔3月20日〕

美智子、雅子、秋篠宮、紀子◆春卒業の音大生による演奏会が皇居・東御苑の音楽ホール「桃華楽堂」で開かれ、美智子や雅子、秋篠宮、紀子らが鑑賞。

美智子◆宮内庁が、美智子が脚に強い痛みがあり、春分の日である21日に予定されている宮中祭祀「春季皇霊祭・神殿祭の儀」への出席を取りやめる、と発表。秋分の日にある「秋季皇霊祭・神殿祭の儀」への出席も取りやめるという報道。

徳仁◆ブラジルの首都ブラジリアで日本の企業や団体などが出展するパビリオンを視察。開催中の「第8回世界水フォーラム」で「水と災害」をテーマにした会合に出席し、英語で講演。地球温暖化などによる水害に触れ「自然の脅威に対抗するため、国際社会は結束して対処していく必要がある」。講演後、記者団に「水問題を解決することが平和につながるという最近の世界の動きを感じた」。

朝鮮学校◆大阪府内の朝鮮学校を運営する学校法人「大阪朝鮮学園」（大阪市）が、大阪府と市による補助金の不支給決定の取り消しと支給義務づけを求めた訴訟の控訴審判決で、大阪高裁が、請求を棄却した。一番大阪地裁判決を支持、学園側の控訴を棄却。

武器輸出◆防衛省が、海上自衛隊の練習機「TC90」3機を26日にフィリピン海軍に対して無償で引き渡すと発表。

〔3月21日〕

徳仁◆首都ブラジリア発の民間機で帰国の途に就く。

「春季皇霊祭・神殿祭」◆安倍晋三首相が、皇居で行われた「春季皇霊祭・神殿祭の儀」に参列。

〔3月22日〕

明仁◆宮内庁が、ハゼの研究をしている明仁が魚類学者らと共に解説の執筆に加わった魚類図鑑「日本魚類館」（小学館）が発刊した、と発表。

徳仁◆ブラジルから成田空港着の民間機で帰国。

代替わり◆共産党の志位和夫・委員長が記者会見で、明仁の退位や新天皇即位の儀式について、政府だけでなく各党の議論を踏まえ、合意形成を図り決定すべきだとの見解を表明。憲法の「国民主権」、政教分離の原則を厳格に守る観点から、新天皇即位に伴う「剣璽等承継の儀」など三つの儀式の「国事行為」としての実施に反対する姿勢を示し「今回は前回と比べ即位までに時間がある。代替わりに伴う儀式は必要だが、現行憲法にふさわしいものを議論していくことを提案する」。

〔3月23日〕

美智子◆東京都渋谷区のチェコ大使館を訪れ、開催中の文学展「変わらぬ原作、変わり続ける翻訳ー日本とK・チャベツクの文学」を見学。

秋篠宮、紀子◆宮内庁が、秋篠宮、紀子が6月に米ハワイを「公式訪問」する方向で検討していると発表。日本人がハワイに移住して当年で150周年となることを記念する式典などに出席し、秋篠宮があいさつすると報道。

イに移住して当年で150周年となることを記念する式典などに出席し、秋篠宮があいさつすると報道。

在沖米軍基地交付金◆防衛省沖縄防衛局の中嶋浩一郎局長が、沖縄県名護市の渡具知武豊市長と市役所で面会し、米軍普天間飛行場（宜野湾市）の名護市辺野古移設に反対した前市長時代に中止していた米軍再編交付金を再開する方針を正式に伝える。

〔3月24日〕

乾通り公開◆皇居・乾通りの一般公開が始まる。

〔3月25日〕

明仁、美智子◆8月上旬、北海道の利尻島を訪問することを宮内庁が検討していると報道。宮内庁関係者によると、2人は、明治政府が1869年に蝦夷地を「北海道」と定めてから150年目を記念する式典が8月5日に開かれるのに合わせて札幌市を訪問し、その後で利尻島に足を運ぶ見通し。

〔3月26日〕

皇太子一家◆「静養」のため、北陸新幹線で長野県入り。宮内庁は、雅子は療養生活が続いており「静かな環境を確保するため」として、具体的な滞在先や期間を明らかにしないよう報道各社に要請していると報道。

「日の君」処分◆学校行事での「君が代」斉唱時に起立しなかったことを理由に戒告処分を受けたのは不当だとして、大阪府立高と支援学校の現・元教職員計7人が府に処分の取り消しと慰謝料を求めた。

訴訟の判決で、大阪地裁が処分を適法と判断し、請求を全面的に棄却。

〔3月27日〕

明仁、美智子◆羽田発の特別機で沖縄県入り。糸満市の国立沖縄戦没者墓苑を訪ね、沖縄戦で死亡した約18万人の遺骨を納めた納骨堂に白菊を供え拝礼。墓苑に先立ち、沖縄平和祈念堂を訪れる。宿舎のホテルで、1962年から沖縄県と本土の子どもの交流を目的に派遣が始まった「豆記者」と懇談。

皇居・東御苑◆一般公開されている皇居・東御苑の総入園者数が、1968年10月の公開から3万人に到達したと報道。

3千人目は、英国からの観光客で、宮内庁の坪田真明・管理部長から明仁、美智子のDVDや、皇居の絵はがきなどの記念品が手渡される。

教科書検定◆文部科学省が、2019年度から使う中学校の道徳と主に高校3年向けの一部教科の教科書検定結果を公表。

〔3月28日〕

明仁、美智子◆那覇発の特別機で、日本最西端の与那国島を初めて訪問し、日本最西端の碑を見学。見学に先立ち、牧場で日本在来馬の一種の与那国馬を見学。昼食会場で、世界最大級のガ「ヨナグニサン」の標本を見て、与那国町立久部良小学校で、地元の伝統芸能「棒踊り」を鑑賞。町漁業協同組合で、地元で水揚げされたカジキを見学し、空路で那覇市に戻る。

〔3月29日〕

明仁、美智子◆沖縄県豊見城市の沖縄空

手会館を視察。沖縄発祥の空手の歴史が分かる展示や、熟練した空手家の演武を見学。演武を披露した空手家と懇談。那覇発の特別機で帰京。

【3月30日】

皇太子一家◆長野県での26日からの「静養」を終え、北陸新幹線で帰京。

代替わり◆政府が、明仁の退位や新天皇の即位に伴う儀式の在り方を検討する準備委員会の第3回会合を首相官邸で開き、各儀式の骨格を定めた基本方針を決定。新天皇の即位の礼の中心儀式「即位礼正殿の儀」を2019年10月22日に「国事行為」として開催し、「大嘗祭」を「公的」な皇室行事にすることが柱と報道。「劍璽等承継の儀」への皇族の参列者について男性皇族のみにすると決め、退位礼正殿の儀などの儀式も「国事行為」とするほか、19年2月24日に東京都内で開く「天皇陛下在位30年記念式典」は内閣の行事



3・11「皇族出席の追悼式典」・一斉黙祷反対闘争

東電福島第一原発事故から七年となる三月十一日、今年も「3・11行動」呼びかけの「原発事故は終わっていない！再稼働反対、責任隠蔽の『皇族出席の追悼式典』・一斉黙祷反対！」集会・デモを、

として執り行うと報道。大嘗祭について

宮内庁が、中心的儀式「大嘗宮の儀」を19年11月14・15日に行うと発表。政府は安倍晋三首相を長とする「式典委員会（仮称）」を秋に設置し、各儀式の詳細な式次第などをまとめた大綱を策定するとともに、府省庁間の事務調整を担う「式典実施連絡本部（仮称）」も発足させる方針で、菅義偉・官房長官が記者会見で「内閣が一丸となって準備を進める」。宮内庁の西村泰彦次長が、「大嘗祭」に国費が使われることを巡り、「平成」の代替わりの際に政教分離に反するとして複数の訴訟が起これ、一部に「違憲の疑い」を指摘する判断があったものの、確定した違憲判決はなかったとして「前回で議論が尽くされた」ということだと理解している。／宮内庁が、東宮侍従と東宮女官を4月1日から各1人増員すると発表。翌年5月1日の新天皇即位に向けた対応で東宮侍

従は6人、東宮女官は5人になると報道。

【3月31日】

「宮廷文化」◆宮内庁が4月4・8日、京都御所で春のイベント「宮廷文化の紹介」を開催すると報道。期間中、紫宸殿の正面近くを通る特別ルートで参観でき、即位の礼に使われる高御座や御帳台、御常御殿や小御所ですすま絵が見ることができるといふ。

宮内庁侍医◆宮内庁が、富久尾航の依頼退職に伴い、東宮侍医の新啓一郎が侍医に就任する人事を公表。

内閣法制局◆内閣法制局が、近藤正春・内閣法制次長の定年を翌年3月末まで1年延長する人事を発表。翌年4月30日に予定される明仁の退位に関する憲法問題に精通しているとして、定年延長が決まったと報道。

日比谷公園から行った。

参加者は二〇人超、「日の丸」を打ち振る右翼の罵声と機動隊、公安警察に囲まれるながら、政府・東電の責任を追及する。反天皇制、反原発闘争の声を上げ続けた。経産省、関西電力支社から一四時四六分、大きな申し入れ書「東電はすべての資産をはきだし、被害者に謝罪と賠償をせよ！」を東電につき付け、桜田公園までデモを貫徹した。

続いて一五時半から再稼働阻止全国ネット呼びかけの「東海第二原発の再稼

働を止めよう！」日本原電前行動に参加し、一八時から「3・11行動」主催の集会を京橋区民会館（中央区）で行った。

元原発労働者（福島から）から「廃炉・除染労働の現場から」と題して報告を受けた。

「3・11」の後、福島に行き、最初は国直轄の榎葉町の先行除染の現場、その後第一原発で休憩所の官吏、汚染水タンク関連、一号機配管工事、富岡町被災家屋解体などで働いた。榎葉町で「特殊勤務手当」の未払いと闘い、やっと危険手当

反天皇制運動



残部僅少！
上下セットで時価1万円
お申し込みは反天連まで
(mail: hanten@ten-no.net)

一万を勝ちとつたら、日当が一万円前後から地域最賃の六〇〇〇円に下げられた上、寮費や食費などの天引きが始まった。もっと労働者に目を向けてほしい。重層的な下請けは土木や建築現場では蔓延していると訴えた。

続いて「4・28—29連続行動実行委」などのアピールを受け、今年の闘争を終えた。来年こそはもっと大きな闘いをするために頑張ろう。

（3・11行動／野村）

天皇の沖縄への「慰霊の旅」と 与那国島訪問について考える練 馬集会

三月一六日（金）夜、練馬区厚生文化会館にて、表記集会が行われた。今回の集会は、天皇夫妻の六回目の沖縄訪問・初めての与那国島訪問を前にして急遽企画されたもので、多くの人々が国会前に駆けつけている最中で集まりが心配されたが、約三〇名の方々が参加し、講師の話に熱心に耳を傾けた。

講師の一坪反戦地主会・関東ブロック共同代表の大仲尊さんは、与那国島出身で、ちょうど二週間前まで与那国に帰郷していたが、多くの島民は天皇来島に無関心で、なかなか正確な情報が入ってこない。一方で、二月後半には公安刑事

一二名が入ってきており、陸上自衛隊駐屯地には、機動隊用の仮設トイレが準備されているとのこと。奇しくも、天皇が来島する二八日は、駐屯地が開設されて二周年で、その陸自と天皇夫妻の何らかの「遭遇」が予想される。その陸自であるが、人口約一七〇〇名の内、自衛官は家族も含めて約三五〇名で人口の二〇％にあたる。空港には迷彩服の自衛官が普通に座っており、政治的にも大きな影響を与えており、与那国の「歴史」の書き換えが憂慮される。そもそも、与那国は台湾との関係が深く、感覚的にもアジアに近かったのに、現在は「国境の砦」に変えられてしまった。与那国は、自衛隊の進出によって危機的な状況に置かれて

いる。

続いて、会のメンバーである池田五律さんからは、明仁天皇の「慰霊の旅」全体を振り返るとともに、琉球弧全域への自衛隊配備・増強について分析した。そして、今後、天皇代替わりを経て、「慰霊の旅」が「自衛隊」慰問の旅へと推移していく可能性を示唆した。

その後、フロアから質問や発言が受けたが、殊に、与那国出身のMさんが、自衛隊配備について、とても憂いていらったことが印象的であった。

当会では、今後リーフレットの作成、六月には学習会第三弾を予定している。（アキヒト退位・ナルヒト即位問題を考える練馬の会／中川信明）

天皇の沖縄・与那国訪問を問う 反天実行委の集会

三月二七日、アキヒト・ミチコは沖縄・与那国を訪問した。それを前にした二四日、天皇「代替わり」と安保・沖縄を考える4・28―29連続行動は、駒込地域文化創造館において、「天皇の沖縄・与那国訪問を問う3・24集会」をもった。

講師は沖縄・一坪反戦地主会関東ブロックの大仲尊さんと、反天連の天野恵一。

まず、与那国出身である大仲さんは、島の暮らしや、語り継がれる沖縄戦の記憶から話を始めた。そして、伝えられる与那国での天皇のスケジュールについて検討し、牧場やヨナグニサンという蛾を見るところが、どこかで自衛隊と非公然

でも接触する場があるはずだ、と注意を喚起した。そして、与那国の「軍神」大舩松市の顕彰や自衛隊誘致など、国境の島として軍事戦略的な意味を与えられ続けて来たこの地を、天皇の訪問を通じて改めて包摂することが今回の政治目的だと述べた。

天野は、八七年の、天皇の沖縄訪問反対運動を通して、自分たちの反天皇制運動が「沖縄と直面した経緯をふりかえり、その過程で「ひめゆりの塔」で皇太子アキヒトに花瓶を投げつけた知念功と出会ったこと、その訴訟記録を読み直して感じたこと、などについて話した。

アビールとして、基地・軍隊はいらない4・29集会、一坪反戦地主会関東ブロックから「辺野古ゲート前連続6日間500人集中行動」へのよびかけ、宮古島ピースアクション実行委員会の清水早子さんからのメッセージも代読された。最後に、実行委によって集会宣言が提起され、4・28―29連続行動への結集が呼びかけられた。

天皇沖縄訪問を報じるメディアのトーンは、「日々沖縄に思いを寄せ続け『戦争の記憶風化』を懸念する両陛下」というものだ。そして、「本土」と沖縄の間の「歴史的なしこり」を、天皇夫婦の活動が癒していったという話だ。今後の行動を通して、その欺瞞性と政治的意味を、はっきりと批判していかななくてはならない。

（実行委／北野誉）

明治150年式典・キャンペーンと「生前退位」

三月二五日、午後二時からピープルズプラン研究所会議室で、「平成」代替りの政治を問う「連続講座」の第4回「明治150年式典・キャンペーンと「生前退位」——近代天皇制国家を問う」が開催された。参加者は約二五人。

この連続講座は「平成天皇制代替りの政治」のプロセスを、まず正面から緻密に批判検証する「作業を通して」「ここ3年」以内の「退位・新天皇即位」の政治イベントに有効に対決するという意図で、二ヶ月に一回のペースで一年以上連続して開催される。

今回は、松井隆志さんが司会をし、太田昌国さんと伊藤晃さんと天野恵一さんが問題提起をするという形で行われた。

まず伊藤さんが「①現代日本国家の二つの国家目標」「②明治国家の国家目標」「③19世紀から20世紀へ」「④戦後「国是」の成立」「⑤日本の野望への世界的批判」の五点について話された。

次に太田さんが、「①現在の東アジアの状況の中で」「②「明治150年記念」（2018年）」「③北海道命名150年記念（2019年）」「③「明治12年」」「琉球処分（1870年）」「④吉田松陰の『予言』」「⑤対置し得るもの」の五点について話された。

最後に天野さんが「（近代の越え方）をめぐる論争」として「1戦後20年」「1965年」VS明治百年「1968年」「2竹

内好、桑原武夫」「3近代「国家主義ナショナリズム(資本・産業)」「科学発展」主義」の内側から近代を超える方法の失敗と敗北」の三点から、マスコミと天皇制の関係を批判的に論じられた。

天野さんの発言の冒頭では、「明治百年」であつた一九六八年に学生運動をしていた自分たちが、「明治百年」キャンペーンに対抗して何かをやった記憶はないが、政府の記念式典は一九六八年一月二三日に行われていること、その二日前の一〇月二一日は自分たちが新宿等でベトナム反戦の大きな闘争を行なっていたことなどが話された。

発言後の質疑応答を含め講座は四時間

近くに及び、今回も熱の入ったものとなつた。

(講座実行委/田中)

八木日誌

3月11日(日) ●原発事故は終わっていない!再稼働反対 責任隠蔽の「皇族出席の追悼式典」・一斉黙祷反対! 3・11行動(集会報告参照)

●事故から7年 追悼と東電抗議

●日本原電本店前抗議

3月14日(水) ●警視庁機動隊沖縄派遣は違法 住民訴訟第6回口頭弁論

3月16日(水) ●天皇の沖縄への「慰霊の旅」と与那国島訪問について考える集会(集

会報告参照)

3月21日(水) ●さようなら原発集会

3月24日(土) ●「天皇の沖縄・与那国訪問を問う集会(集会報告参照)」

3月25日(日) ●「平成」代替わりの政治を問う・連続講座第4回 明治

150年式典・キャンペーンと「生前退位」

3月27日(火) ●おことわりリンク都教委申し入れ

3月31日(土) ●アンダーコントロール?復興? 3・11と「復興五輪」(報告次号)

4月2日(月) ●辺野古実防衛省行動

日本共産党 INFORMATION

開催中・7月末予定 ●日本人「慰安婦」の沈黙

13時・18時(月・火・休日休館) / W

A.M. 女たちの戦争と平和資料館(地下鉄早稲田駅ほか) / 連絡先: 同館(03-3202-4633)

4月15日(日) ●多摩地域メーデースタート集会 戦時下に抵抗した労働者たちがいた

13時30分開場 / 府中市市民活動センター・プラッツ第3会議室(京王線府中駅南口) / 大庭伸介 / 主催...

2018多摩地域メーデー実行委員会

【学習会報告】

T・フジタニ『天皇のページェント』

(NHKブックス、一九九四年)

前回のテキストは不評だったが、今回はとても面白く読んだという感想で一致した。

本書のテーマは、「近代日本のナショナリズムが誕生するうえで公的な国家儀礼が果たした役割を再確認」することにある。この本では、近代日本の国家の儀礼空間を「ページェント(野外劇、見世物)」として位置づけ、その具体的な展開を追っている。

近代の産物としての「伝統の発明」というのは、すでにおなじみの議論といえ

るが、近代日本の天皇崇拜も、「あまり知られていなかった天皇を中心とする国家の過去を想起させる」ものとして作り出されていった。そのために役立つような「物質的な意味の担い手」=「記憶の場」が公的儀礼である。

以下、東京という都市も儀礼の中心地として改造されていったこと、近代日本においては「進歩・文明」を体現する都市=東京と、奥深い「伝統」の担い手としての都市=京都という「二つの首都」が存在し、それが相互補完関係にあった

こと(さらにそれは、近代天皇制の二重性とも相即的であったこと)、フーコーの議論をベースとして分析される、儀式を通じてつくりだされた「天皇と群衆」における、視線(まなざし)のポリテクス……など刺激的な論述が続くが、とくに議論になったのは、最後の第5章「『象徴天皇』と電子メディア時代のページェント」だ。昭和天皇「Xデー」時期の天皇のページェントについてフジタニは「大喪の礼」がテレビ画面にふさわしいかたちで構成されていたこと、連続して映像が流され、「お茶の間」というプライバシーの聖域に侵入」してきたこと、その意味では、「政教分離」に関わって政府が強弁した「公私の儀式」の使い分けが意味を持たないこと、覗き見趣味的

なテレビ報道によって「皇威/アウラ」は喪失し、「もはや国民は君主のまなざしの従順な対象ではない。むしろ、国民自身が天皇・皇室に向かってその容赦ない視線を向けてゆく主体」となったという議論など、少なくとも当時、私たちにも一部分はそうに見えていた事実を指摘している。メディア環境も大きく変わっているなかで、再びページェントの季節がめぐっている現在の儀礼とメディアによる演出、それが作り出す天皇意識がどのようなものとして考えられるべきかが、私たちの課題である。

次回は四月二四日。テキストは加納実紀代編『女性と天皇制』(思想の科学社)。

(北野豊)

(070-5567-4777 府中緊急派遣村労働)

●連続学習会・象徴天皇制を考える『天皇家の財布』を読む

14時／つくば市立春日交流センター
／主催：戦時下の現在を考える講座

(090-8441-1457 加藤)

4月17日(火) ●大軍拡と基地強化にNO！

アクション2018 (仮 準備会&学習会)

18時30分／文京シビックセンター5
F (地下鉄後楽園駅ほか)／渥美昌純、

杉原浩司／呼びかけ：有事立法・治安
弾圧を許すな！北部集会実行委員会

(03-3961-0212) ほか

4月21日(土) ●戦争に協力しない！させ
ない！練馬アクション第20回記念講演

会

15時／練馬区役所西庁舎(西武池
袋線ほか練馬駅)／横着宇／連絡先：

090-5208-5803 (池田)

4月22日(日) ●検証：原子力規制委員
会の5年半

13時15分開場／万世橋区民会館6F
(JRほか秋葉原駅)／新藤宗幸、山

崎久隆／主催：福島原発事故緊急会議

(090-1705-1297 国富)

●日本国憲法制定過程から排除された沖縄

13時30分開場／東京しごとセンター(JR
飯田橋駅ほか)／古関彰一／主催：

琉球／沖縄シンポジウム実行委員会

(042-637-8872 前田)

4月23日(月)／28日(土) ●辺野古ゲ

ート前連続6日間5000人集中行動

8時／16時／辺野古キャンプ・シユ

ワゲート前／主催：同実行委員会

(FAX：0960-55-2245)

4月25日(水) ●辺野古海上座り込み

に呼応する官邸前行動

18時30分／首相官邸前(地下鉄

国会議事堂前駅)／主催：辺野古

への基地建設を許さない実行委員会

(090-3910-4140 一坪反戦関東ブロック)

4月27日(金) ●安倍靖国参拝違憲訴訟控

訴審第1回口頭弁論

13時30分開廷・東京地方裁判所・高等

裁判所101号法廷(地下鉄霞ヶ関駅)

／16時30分／報告集会・文京区民セン

ター12A(地下鉄春日駅ほか)／連絡

先：安倍靖国参拝違憲訴訟の会・東京

(noyaskuni2013@gmail.com)

●「最悪の人道危機」イエメン内戦のいま

18時30分／文京シビックセンター4

F(地下鉄後楽園駅ほか)／久保田弘

信／主催：イエメン内戦を知る講演会

実行委員会(090-6185-4107)

4月28日(土)／7月8日(日) ●風間サ

チコ展 デイスリンピア2680

9時／17時／原爆の図 丸木美術館(東

武東上線森林公園駅からタクシー・バ

ス)／連絡先：同館(0493-22-3266)

4・28ー29行動▲28日：明治150年：日

本(ヤマト)による沖縄差別を問う

18時開場／文京区民センター3A(地

下鉄春日駅ほか)／湖南通

▼29日：反「昭和の日」デモ

14時集合／常磐公園(JR神田駅ほ

か)／主催：天皇「代替わり」と

安保・沖縄を考える4・28ー29行動

(090-3438-0263)

4月28日(土) ●絵本で伝える戦争と暴力

14時／アバコチャペル(地下鉄早稲

田駅ほか)／クオン・ユンドク／主催：

アクティブ・ミュージアム「女たちの

戦争と平和資料館」(03-3202-4333)

4月29日(日) ●沖縄の元海兵隊員による

性暴力被害から2年 基地・軍隊はいら

ない！4・29集会

18時15分開場／全水道会館(JRほか

水道橋駅)／高里鈴代、垣花暁子／主

催：同実行委員会(090-3910-4140 一坪

反戦関東ブロック)

5月1日(火) ●多摩地域メーデー集会&

デモ

17時30分集合／井の頭公園三角広

場(井の頭線井の頭公園駅)／主催：

2018多摩地域メーデー実行委員会

(070-5567-4777 府中緊急派遣村労働)

5月3日(木) ●憲法集会2018

11時／有明防災公園(ゆりかもめ有

明駅)／主催：同実行委員会

●やめよう改憲！生かそう平和憲法！

13時／立川柴崎学習館ホール(JR

立川駅南口徒歩10分)／澤藤統一郎／

主催：市民のひろば・憲法の会(FAX:

042-536-3212 ならぎやま)

●明治公園国賠まるわかり集会

18時／千駄ヶ谷区民会館(JR原宿

駅)／主催：明治公園オリンピック追

い出しを許さない国家賠償訴訟請求訴

訟原告団

5月10日(木) ●生前退位、何が問題か

改憲「天皇「元首化」を考える！

18時30分／かながわ県民センター

(JRほか横浜駅)／北野誉／主催：

日本基督教神奈川教区社会委員会

ヤスクニ・天皇制問題小委員会ほか

(090-3909-9657)

5月13日(日) ●辺野古新基地NO！沖縄

「日本復帰」46年を問う

18時／南大塚ホール(JR大塚

駅)／主催：一坪反戦関東ブロック

(090-3910-4140)

5月20日(日) ●「平成」代替わりの政

治を問う・連続講座第5回〈新たな「人

間宣言〉ってなんだ？

13時30分開場／ピープルズ・プラン研

究所(地下鉄江戸川橋駅ほか)／鶴飼哲・

天野恵一・米沢薫／主催：ピープルズ・

プラン研究所(03-6245-5748)

5月26日(土) ●原発労働者は団結して

要求する！5・26春闘集会

18時／文京区民センター2A(地下

鉄春日駅ほか)／梅田隆亮、池永修、

あらかぶ、見口要、斎藤征二、佐々木

史朗／主催：被ばく労働を考えるネッ

トワーク(090-6477-9338 中村)



●久しぶりに作業のお手伝い。暖か
くなってきて、動きやすいけど、み
んな忙しいから身体、気をつけてね！
本日の参加は木菟、鰐、蝙蝠、熊、猿、
ちらっとナマケモノでした。(黒貂)

